

2. 八十姫の婚約と嫁入りの実現

(1) 家康の狙い通りに働く清正

①清正、福島正則を諫める

八十姫と頼宣の婚約により徳川家姻戚となることになった清正は、すっかり徳川側の人間になったと思わせる逸話が徳川実記に残っています。1610年のことですが、この年清正らの大名は、天下普請として名古屋城築城を命じられます。徳川幕府成立から江戸城、駿府城と天下普請が続いていました。ある時一緒に現場に居合わせた清正・福島正則・池田輝政が話をしていると、正則が家康の娘婿として大身大名となっている輝政に対し、「なんで妾の子（義直）の城まで普請させられるのだ。お前から徳川殿によく言ってくれ。」と言いました。これに対して清正は、激しい剣幕で、「そんなことは言うものでない。文句があるなら国へ帰って戦の準備でもしろ」と諫めたと言います。頼宣に娘を嫁がせることになった清正は、輝政に近い立場であり、徳川幕府側の立ち位置になっていることが伺われます。同時に、徳川幕府に歯向かっても勝ち目はないと思っていたことが伺われます。

②二条城会見の実現

この婚約に込めた家康の意図を知る清正は、二条城会見の実現に向けて奔走します。豊臣家重臣にとっては、今や清正は徳川家外戚になろうとする裏切り者であり、反発する者も多かったと思われます。しかし、幕府が江戸に移り、多くの西国大名が大坂城への伺候を取りやめた後も、清正は江戸への行き帰りに伺候し続けていたことから、豊臣家にも徳川幕府との衝突を防げるのは清正しかいないという雰囲気があったと思われます。秀頼に二条城に出向いて家康に挨拶するようにとの徳川方の要求を、当初淀殿が拒否しますが、清正は、浅野幸長や福島正則らと、豊臣家の安泰のため出向くべきで、会う趣旨は秀頼と秀頼の妻千姫の祖父である家康との懇親であると説得し、承諾させます。二条城会見は、秀頼と千姫の祖父家康との懇親会という雰囲気を作り出すため、姻戚関係となる清正と頼宣、浅野幸長と徳川義直（家康9男・尾張城主・幸長の娘と婚約）は、揃って東寺で秀頼を迎えます。ドラマなどでは、家康と秀頼が食事をしながら懇談する間、清正は秀頼の傍を片時も離れず、懐には脇差を隠し持っていたとされていますが、これも「清正＝豊臣恩顧」の大名という図式から導き出された設定です。実際は、二条城会見を見聞した細川忠興が国許の豊前小倉藩主細川忠利に送った書状により、清正は、家康、秀頼らが懇親した部屋とは別の室でその他の供の者と一緒に相伴に預かっていたことが明らかになっています。

二条城会見の実現は、これまで朝鮮での武功だけが目立った清正が交渉で上げた初めての重要な成果だったと思われます。これは、家康が頼宣と八十姫の婚約で狙った意図そのものでした。従って家康には、今後清正が豊臣家の徳川家臣従を説得してくれるのではという期待が大きくなっていったと思われます。しかし、二条城会見の約3か月後、清正は帰らぬ人となります。これは、二条城会見実現のための交渉で強いストレスに晒され続けたことが一因と思われます。

(2) 清正死去の影響

慶長16年(1611年)6月に清正是死去しますが、これは家康の戦略に大きな狂いを生じさせることとなり、家康の落胆は大きかったと思われます。家康は、秀吉が織田家に対してしたように、豊臣家が徳川幕府に臣従するよう時間をかけて働きかけてきましたが、実現しませんでした。家康の寿命も長くなり、家康は、豊臣家を説得できる可能性のある者として清正在に期待し、頼宣と清正の娘八十姫の婚約もこのためのものと思われます。しかし、清正の死によりこの可能性は潰えました。ここから大坂の陣の流れが始まったと言っても過言ではないと思います。

清正の死に落胆したのは、徳川に対する仲介者を無くしたと感じた秀頼も同様です。秀頼は、清正が病気で倒れたと聞くと、醍醐寺の僧に清正快癒の祈祷をさせたと言います。

また、清正と同時期に家康の10男義直に娘を嫁がせることになった浅野幸長も驚愕したと思われます。幸長と清正は、慶長の役の蔚山城籠城戦と一緒に戦った仲です。と言っても、幸長が朝鮮に出兵する際、清正は、幸長の父の浅野長政(北政所の養家の婿養子)から「息子を頼む」と頼まれていますから、清正にとり幸長は弟分だったと思われます。幸長は、清正在の限り、豊臣家および徳川幕府の圧を直接受けることはありませんでした。清正の死により、幸長は、家康が期待する豊臣家説得の重責を1人で背負い込むこととなったのではないのでしょうか。清正死去の約2年後、幸長が38歳の若さで死去したことは、このことと無縁ではないと思われます。

(3) 八十姫の嫁入り

①暗礁に乗り上げた八十姫の婚約

慶長16年(1611年)6月23日に清正在が死去したことにより、1610年に結納使三浦為春が熊本城に来訪して正式に決まった八十姫と頼宣の婚約は、破断になってもおかしくなかったと思われます。この婚約の目的は、豊臣家にパイプを持つ清正をして豊臣家の徳川幕府臣従を説得させること、および説得に失敗し豊臣家と戦った場合に、清正在が豊臣家に加勢しないことを確実にするためだったからです。しかし、清正の死去により、豊臣家説得の役割は果たせなくなりましたし、豊臣家加勢のことも考える必要がなくなりました。それなら何も清正の娘を頼宣の正室に迎える必要はなく、徳川幕府安定を考えれば他の有力大名から正室を迎えた方が得策です。従って、徳川幕府内では、当然婚約解消も語られたと思われます。清正の長女あま姫は、9歳で榊原康勝に嫁いでいますし、千姫は7歳で秀頼に嫁いでいますから、清正存命であれば、八十姫は、1610年の結納後2、3年以内に嫁いでいた可能性が高いと思います。

そこで実現に向け尽力したのが、清正の正妻で八十姫の母清浄院だったはずです。清浄院は、家康の生母於大の方の弟刈谷藩主水野忠重の娘ですので、家康の従妹に当たり、家康の養女として清正在に嫁いでいます。

②水野家の歴史

清浄院の実家水野家は、戦国時代の初めは、尾張国知多半島から三河国刈谷を有し、尾張

の織田家、三河の松平（徳川）家と拮抗した存在でした。当時の水野家当主水野忠政は、娘を松平家当主松平忠広に嫁がせます。これが家康の生母於大の方です。ところが忠政の後を継いだ水野信元が織田信秀（信長父）と同盟を結んだため、於大の方は離縁され、刈谷の実家に帰されます。その後信元は、織田信長と徳川家康の同盟（清州同盟）の仲立ちをしますが、信長に武田勝頼との内通を疑われ、家康により殺害されます（1575年）。ここで一度水野家は断絶になりますが、1580年に信長に許され、忠政の4男忠守が尾張国小河藩、9男忠重が三河国刈谷藩の藩主に復します。その後、本能寺の変による信長の死去、家康の秀吉臣従などにより、主君は信雄、秀吉に変わり、秀吉死後は家康に与します。その後水野家は、家康生母の実家ということもあり、徳川譜代大名扱いで、その一族は多くの大名家をなすとともに、享保の改革を補佐した水野忠之や天保の改革を主導した水野忠邦らの著名な幕府老中を輩出しました。

③水野勝成

刈谷藩主となった水野忠重は、関ヶ原の戦いの直前に石田三成方の大名に刺殺され、長子水野勝成が後継となります。水野勝成は、清正の継室となった清浄院の兄にあたり、波乱万丈の人生を送っています。勝成は、若い頃、戦に出たら武功を挙げるけれど軍法は守らない、女遊びは派手な問題児だったようです。あるとき、父の忠重寵臣の勘定頭に遊びの金を工面させますが、それが忠重にばれ、こっぴどく怒られます。しかし、勝成が使ったという金額には、その勘定頭が流用したものが含まれていたことから、勝成は、その勘定頭を斬殺し、刈谷藩を出奔します。それに対し忠重は、勝成を武家奉公構え（主君に不義を働いたとして他家での奉公を禁じる措置。これが知れば通常他家は雇わない）にします。そのため、勝成は、尾張や三河では仕官できず、刈谷を離れます。再び刈谷に帰ったのは、15年後でした。

刈谷を離れた勝成は、一時秀吉に陣借し、雑賀攻めや四国平定に参加し、秀吉から700石の知行を与えられています。しかし、長くせずして秀吉と問題を起こし、中国地方に逃走したようです。そして、九州平定に際して九州に向かいます。戦いには参加できなかったようですが、九州平定後肥後藩主となった佐々成正に仕官し、肥後国人一揆を戦います。成正が秀吉から切腹を命じられた後は、小西行長に仕官し、天草国人一揆を戦っています。この際援軍にきた清正を知るところとなり、小西の元を去ってから一時清正の所に身を寄せていたとも言われています。その後も九州、備中、備前などを放浪した勝成は、1599年、秀吉死去後慌しくなった京に上り、密かに家康の伏見屋敷を警護します。それが天草国人一揆の際に清正に仕え、当時家康に仕えていた山岡道阿弥を通じ家康の知るところとなり、家康の命により父忠重と和解します。同年に勝成の妹清浄院が清正に嫁いでいますが、これらの縁がつながったものと思われます。その翌年の1600年、勝成は、刈谷藩に帰り、忠重の代わりに家康の上杉景勝討伐軍に加わります。その行軍中に、刈谷で父忠重が石田三成方の大名に殺害されたため、急遽刈谷に帰り、刈谷藩主を継ぎ、関ヶ原の戦いに参戦します。そして大垣城開城戦で戦功を挙げます。その後、1615年の大阪の冬の陣では先鋒を務め

るなど顕著な戦功を挙げ、大和郡山藩6万石に加増転封されます。そして1619年には、福島正則の改易に伴い分割新設された備後福山藩10万石の藩主となります。福山藩では、福山城の築城、城下町の整備、新田開発、藺草・綿花の栽培と畳表・綿織物の製造販売など産業を振興し、福山藩を全国屈指の豊かな藩としました。これにより勝成は、福山の開祖として今でも福山の英雄となっています。この点は、清正とそっくりです。また勝成は、1632年の加藤家改易に際し、幕府から派遣され、熊本城引き渡しに立ち会っています。その後清浄院とお付きの者を福山に連れて行くのですが、清正とは義兄弟であったにも関わらず、親しく交流した記録はありません。ただ、清正の重臣飯田角兵衛と交流が深かったようで、多数の手紙が残されているようです。飯田角兵衛とは、天草国人一揆をお互いに先鋒として戦っており、それ以来交流があったのでしょうか。そのとき清正は、肥後24万5千石の大名であり、勝成とは身分が違い過ぎたせいでしょうか。また、九州で最初に仕えた佐々成正が切腹になった際、清正は秀吉の上使の1人として肥後に派遣され、事の顛末を秀吉に報告しており、勝成は、成正が切腹に至ったのは清正のせいであり、その後釜に座った清正には、気持ちの上でわだかまりがあったのかも知れません。更には、性格の違いがあげられます。勝成は、若いときから合戦で活躍し、いわゆる合戦畑の武闘派です。刈谷藩出奔の原因も傷人沙汰であり、その後仕官した先でも傷人沙汰を起こしています。即ち、根っからの武闘派なのです。一方清正は、秀吉に近侍し、兵站や直轄地管理、上使などを行ってきた縁故採用のキャリア官僚の実務派です。ここが本質的に合わなかったのではないのでしょうか。しかし、勝成が福山藩で行ったことは、清正が肥後一国の太守となってから行ったこととよく似ており、関心を持って見ていたのでしょうか。勝成を知ると、清正亡きあと忠廣が育つまで、勝成がワンポイントリリーフで肥後藩主になっていたらよかったのにと感じてしまいます。

尚、勝成は、将軍家光の要請により、島原・天草一揆にも九州以外的大名として唯一参加しています。そして、一揆終了後天草の領主に就任したのは、備中成羽藩主山崎家治ですが、成羽といえば、勝成が流浪中に足軽頭として仕えた成羽城があったところで、そのとき勝成は、成羽城主の娘珊瑚に恋心を抱きますが、身分が違い過ぎてかないませんでした。しかし、その後勝成が刈谷藩主となってから、関ヶ原の戦いで毛利方だったため毛利領長門に流れ住み、36歳になっていた珊瑚を探し出し、正室に迎えます。山崎家治の天草領主就任は、成羽繋がりの勝成の人選だと思われまます。

④八十姫は「水野の娘」として嫁入り

八十姫の頼宜への嫁入りは、家康死去の翌年1617年に実現していますが、それは、八十姫を「清正の娘」としてではなく、家康生母於大の実家である水野家の娘清浄院の娘で、水野家宗家水野勝成（当時大和郡山藩主）の養女として、即ち「水野の娘」として頼宜の正室に迎えることになったと思われまます。

これは、八十姫を迎える頼宜方の受け入れ体制を見ても伺えます。頼宜が水戸藩主のとき、頼宣は駿府城在住で、水戸の藩政は、頼宣の傅役で付家老水野重央（しげなか）が執り行っ

ていました。1609年、頼宣が駿府藩主へ転封になると重央は、駿府藩浜松城主として頼宣を補佐し、1619年に頼宣が紀伊藩主へ転封になると付家老として紀伊藩へ移り、新宮3万5千石を与えられます。この重央は、水野忠重の弟の子であり、勝成・清浄院の従兄に当たります。

清正死後八十姫の頼宣への嫁入りが実現したのは、このような徳川家と水野家の深い関係があったためと考えられます。一方の肥後藩では、その翌年「牛方馬方騒動」が起きていること、その後の加藤家藩政は問題続出で、最終的には改易になったことを考えると、結局これが一番良いやり方であったと思われます。

この結果八十姫は、頼宣へ嫁入りした後、豊臣恩顧の「清正の娘」としていじめられることはなく、「水野の娘」即ち身内として大切にされたと思われます。また、姑（頼宣の生母）のお万の方は熱心な法華経徒であり、同じく熱心な法華経徒で大檀越として知られた清正とは宗教的繋がりがあり、これも八十姫と徳川家との関係を良いものにしたと思われます。八十姫は紀州徳川家で幸せな人生を送ったように思われます。